『まんじ』89 号(2003.8)

# 晋州城

新井　宏

韓国南部中央にそびえる最大の山塊智異山に水源を持つ南江は、晋州市近辺まで南下してくると、もう大河の風格を示し始める。二百メートルに近い川幅いっぱいに水をたたえて蛇行する様は、遠目にはライン河のようであり、右岸にそそり立つ岩山はローレライを思わせる。このままあとまっすぐ十キロも南に下れば晋州湾に注ぎ込む。晋州市を流れる南江が晋州湾に注ぎ込むのに何の不思議もない。

ところが南江は突然ここで大きく東に向きを変えてしまう。大河をさえぎるほどの山地があるわけでもないのに、いったん東に向かった南江は更に延々と小さな山間を蛇行しながら二百キロも流れつづけ、洛東江と合流して半島の東南端、釜山の手前でやっと海に出る。

壬辰倭乱(文禄の役)の時、晋州が悲劇の激戦地となったのも、このような地勢と無関係ではない。日本側にとって、海にも近く、また穀倉地帯の全羅道(韓国南西部)を制圧するには不可欠の要衝であった。

小西行長の率いる第一軍が釜山に上陸したのは文禄元年(一五九二)四月十三日である。以下、第二軍の加藤清正、第三軍の黒田長政、そして第九軍まであわせて十五万八千七百名が相次いで上陸している間に、二手に分かれて北上していた小西行長と加藤清正は早くも二十日目の五月三日には首都漢陽を陥落させ、六月十五日には小西行長が平壌を占拠している。

それは戦乱に明け暮れていた日本と二百年も大きな戦争を経験していなかった朝鮮、周到な準備をしてきた日本と不意打ちを受けた朝鮮の違いであったが、もうひとつの要因に李朝支配者階級に対する朝鮮の民衆の離反もあった。上層の役人たちの多くは、住民たちを放置したまま、真っ先に安全地帯に逃げ帰ってしまった。王も大臣も都を逃げ出した。残された一般庶民たちの中には、

暴徒化したり、日本側についた者さえあったという。

しかし状況は間もなく変化する。各地に続々と義兵が起こる。それらの義兵将はほとんどが官界から疎外された儒学者や文官、僧侶、下級武士など地域に密着した人物であった。いったん占拠した各地の邑城がゲリラ戦で奪い返され、前線への補給が途絶え始める。しかも七月九日の閑山島・安骨浦の戦いで日本水軍は李舜臣の率いる朝鮮水軍に大敗を喫し制海権を奪われてしまった。そのため名護屋に控えていた第十軍から第十六軍までの十一万八千三百名を小西行長の待つ平穣に投入し、明に向かわせる計画は完全に挫折してしまう。

そして七月になると逆に明からの救援軍が鴨緑江を渡って来るようになる。

このような状況の中で、日本側はなによりも兵站補給のため、穀倉地帯の全羅道を抑える必要があった。しかし全羅道攻略を担当する第六軍の小早川隆景は郭再祐などが率いる義兵等のため、南江の西にでることさえ出来ずにいた。わずかに南海岸沿いに確保していた固城や泗川さえも、制海権を奪われた状態では、義兵に脅かされ次々に敗退してしまった。

小兵力を分散展開して、支配地域を広げて行くやり方では、あきらかに義兵側に利があった。かっての伽耶の故地を抜いて、早急に全羅道にでるには、大兵力を集中して、本拠地である晋州を制圧するのが急務であった。釜山の西、金海城内にいた加藤光泰、長岡(細川)忠興、長谷川秀一などの諸将は合議の上、二万の兵力を率いて晋州に向けて九月二十四日に出発する。

晋州城は南江の北側に隆起した傾斜岩帯の上に築かれた州城で、周囲が千六百メートルくらいある。南江側は切り立った岩壁で天然の要害であり、他の三面も斜度のある台地の上にあり、石築の城壁で囲まれていて、朝鮮の城としてはめずらしく強固な構えである。

この時晋州城を守っていたのは晋州牧使の金時敏である。前の晋州牧使は、他の上級役人と同様、判官の金時敏を伴って、さっさと智異山の麓まで逃げてしまっていた。そこにかけつけてきたのが慶尚右道招諭使の金誠一である。彼は名誉挽回をかけて金時敏を晋州城に連れ戻すのに成功する。

そもそも緒戦から朝鮮側が負け続けたのには、前々年に通信副使として日本に派遣された金誠一の楽観論のせいもあった。時の正使、西人派の黄允吉が、日本は必ず侵攻してくるだろうと復命したのに、東人派の彼は侵略の気配が見られないと述べ国を誤らせた。李朝は政争の国、通信使出発の時は西人派の天下であったが、その間に政変があり東人派の柳成龍が右議政の地位についていた。冷静な情勢分析よりも派閥の論理が優先した。

その金誠一は壬辰倭乱（文禄の役）が始まる直前、ま

さに直接進攻を受ける慶尚右兵使の地位にあった。当然責任を取らされ罷免送還される。しかしここでも柳成龍の弁護で処罰を免れ、慶尚右道招諭使に起用される。いわば義兵を組織し官軍との調和を図るための責任者であった。

金誠一はさすがに期するものがあり、よく義兵を集め、義兵将たちへの支援に奔走し任務を果たす。特に紅衣将軍として有名になる宜寧の郭再祐が挙兵した時、それを反乱と見なし、処刑しようとした慶尚右道監司に対して強力に反対し、官祖に訴えでて、これを救ったのが大きかった。その結果、監司が罷免送還されると同時に、事態も正確に朝廷に伝わり、義兵活動に対する評価も高まり、義兵に対しても武器軍糧の供給も行われるようになった。義兵活動が、この地方で最も盛んであったのには、金誠一の役割が極めておおきかったと言えよう。

その金誠一が、晋州牧使に従って智異山麓まで逃避していた判官の金時敏をつれもどすのに成功する。そして牧使の職責を代行させて、募兵や武器の整備、城池の修復を行わせ、晋州城を死守するように命ずる。金時敏も期待に応え、義兵を助け固城や泗川を奪い返し、八月七日には正式に晋州牧使に任命される。

そのような状況の中で十月五日から第一次晋州城攻防戦がはじまる。この時、城を守っていたのは三千七百名、ただし大部分は寄せ集めで、とても精兵とは言えなかったが、地域に展開する義兵たちの熱烈な要請を受けて、城を死守する決心をする。やはり晋州城あっての義兵活動であった。

この時、たまたま慶尚右道兵使の柳崇仁が近郊の戦いで敗れ、手勢と共に晋州城に逃げ込もうとする。しかし金時敏は固く城門閉ざして、これを許さなかった。城門を開くのに乗じられることを恐れたこともあったが、せっかく守城体制を築き上げたのに、格上の兵使が入城したのでは指揮系統に乱れがでることを恐れたためだというのが通説である。しかし、それよりも城外に展開する義兵などの戦力があってこそ意味のある籠城であり、牧使金時敏の戦略的な判断であったとする方が妥当であろう。

結局、柳崇仁は泗川県監の鄭得悦らと共に、城外で戦死してしまうが、これを城外で伝え聞いた義兵将、紅衣将軍の郭再祐は金時敏の処置を褒め称えている。

かくして第一次晋州城の攻防戦がはじまるが、状況を簡単に整理して置くと、攻城側の日本は、加藤光泰、長岡(細川)忠興、長谷川秀一など二万の兵を晋州城の北側すなわち南江と反対側に集中して展開させたのに対して、守城側は金時敏以下三千七百名が晋州城に入ったほかに、晋州を取巻く周囲の飛鳳山、石甲山や南江の対岸にある望晋山などに義兵四千名程度が次々に集まり、分散して

対峙する。

戦闘第一日目の十月五日は、「一箭一丸たりとも無駄にせず塁を守り敵の状況を監視して静かに待機せよ」と言う金時敏の命令のもとで、城内巡察を強化し、老弱男女たちには全員男服を着せて兵士のように見せかけ、手薄な兵力を悟られないようにして、戦闘準備を整えた。

実際の戦闘は六日早朝から始まる。日本側は、三隊の縦列に分かれて一気に攻撃に出る。記録によると、あるいは騎馬で横走りする者、あるいは円形の金扇を長い台の上に差し立て振り回す者、あるいは金の光を出す雲形の扇を背負う者、あるいは鶏羽冠を被る者、あるいは被髪仮面を付けた者、あるいは角の付いた金仮面を被つた者たちが、いろいろな旗印を風に靡かせ、青藍や紅蓋の日傘を担ぎ、剣光を日の光で七色の虹に輝かせるなど、奇形異状な軍容であったという。このような色とりどりのいでたちが当時の実態であったとも思えないので、おそらく異民族に対する心理戦の意味が含まれていたのであろう。

かくして、攻撃側は示威行動を繰り返しながら、岩石で堀を埋め、足場を築き城に近づく。その一方で、付近の小山から銃の一斉射撃をしたり、全軍がいっぺんに大音声を挙げたりして、守城側を脅かすが、城兵たちは金時敏の命令を良く守り、静まりかえっていて、動揺した様子を見せない。

攻撃側の主武器はもちろん新式の鉄砲である。それに対して守城側は一部大砲も備えていたが、やはり主力は旧式の弓矢であった。装備面では比較にならない。もともと攻城側を十分に引き付けてから戦闘を始めるしか方法が無かったのであるが、威嚇に屈せず、冷静に対処して、攻城側の弾薬を消耗させる作戦が徐々に功を奏する。

この日の夕刻には、義兵将の郭再祐が攻城側の後ろの飛鳳山で烽火を上げ、「紅衣将軍が大軍を率いて救援にやってくる」と大声で叫ぶと、攻城側は非常に驚き、警戒のため一晩中眠れない状況を生じてしまった。それと同時に、固城から援軍を率いてやってきた義兵たちも晋州城の南、南江を挟んでそそり立つ望晋山に陣を敷き、多数の篝火を焚き、太鼓を打ち鳴らして、城内の兵士たちを鼓舞した。

翌七日になると、攻城側は終日、鉄砲を打ちかける一方で、近隣の民家を略奪し、焼き尽くし、捕虜にした子供たちをつかって、「八道すべてが既に平定された」と叫ばせ、降伏を強要する作戦にでる。これに対して、金時敏は門楼の上で楽工たちに琴笛を演奏させ、余裕のある模様を演出する。まさに心理戦である。

しかし心理戦で決着がつく訳がないのが、異民族間の戦争である。日本側は各種の攻城用の装置を準備し始め

る。そのひとつは大竹と板材で骨格を組み立てた後に石と土で補強した土塁のようなもので、上から大筒や鉄砲で攻撃できるようになっている。また数多くの竹梯子や三層になった台車型攻城装置も次々と作り出した。

これに対して、守城側も玄字銃筒という鋳鉄砲や火薬・薪そして大石を準備し、竹梯子や三層台車に対しては、長い柄に斧や鎌を取り付けて対抗する。大砲は通常なら攻城側にとって有効な武器であるが、この場合、日本にはあまりない武器であったこともあって威力を発揮する。一気に攻め落とす計画であった日本側にとってはまったく予想外の苦戦となった。その上、城外には義兵団が次々に集結してゲリラ戦を繰り広げ背後を脅かす。

攻める方も良く攻めたが、守る方がもっと良く守ったというのが実際であった。激しい戦闘が続くが決着がつかない。日本側はいったん退却すると見せかける詭計まで用いて城兵を誘い出そうとするが、これもうまく行かない。

そして十日になる頃には、義兵たちが次々と増強されるなかで、日本側は早々に決着をつけざるを得ない状況においこまれてしまった。

この日の総攻撃は夜明けとともに始まる。日本側は兵力をふたつに分け、一万が東門を、残りの一万が北門を攻める。特に城壁が低い北門では、いったん攻め込むことに成功したが、副将格の前万戸崔徳良などの活躍により体勢を立て直すことに成功する。しかし、その中で総指揮官の金時敏は流れ弾にあたり戦死してしまう。日本側も長岡忠興の弟玄蕃之允が戦死するほどの激戦であった。

結局、十時頃になっても城内へ突入することができず、折から雷雨がひどくなったこともあり、日本側は多くの死体を遺棄したまま引き上げを開始する。このままとどまり、攻撃を続けることは危険であった。一方、守城側はもとより、外部に展開していた義兵たちにも本格的に追撃する力は残されていなかった。

この戦闘を韓国では壬辰倭乱の三大戦捷のひとつに上げている。とにかく陸戦における最初の勝利であった。

勝因は、何といっても義兵たちの活躍にあった。特に紅衣将軍の郭再祐が南江を抑えていて、日本側が南江沿いに進むことが出来ず、山越えで晋州に向かわざるを得なかったことが、長期戦を困難なものにしてしまった。それから攻城戦でありながら、攻める側を取り囲むかのように義兵が展開していて、周囲を制圧することができず、ゲリラ戦で消耗してしまった。退却したのは正しい選択であった。

これによって、日本側は穀倉地帯の全羅道に入ることができなくなったばかりでなく、慶尚右道さえも支配し

得なくなってしまった。しかしこのことが後の大悲劇を生む。

ちょうどこの頃、明はやっと本格的な参戦を決意する。既に七月頃から五千人規模の援軍を送り、朝鮮軍と合流して平壌城の小西行長を攻めるなどしていたが、大敗してしまっていた。その報告に衝撃を受けた明は十二月になると必勝を期して、李如松を提督とする正規軍の精鋭四万八千名を送ってくる。

まず李如松は翌年一月八日、朝鮮官軍一万名と共に、小西行長以下八千名が守る平壌城を総攻撃する。兵力に大差があったが、日本側は守城の利と鉄砲の威力によって良く戦い、かえって明・朝連合軍側に負傷者が続出する。

そこで李如松はいったん兵を引き、退路を保障して開城を勧告する。明としては日本軍を追い払えば勝利であった。兵糧不足に悩んでいた小西行長軍もここまでが限界であった。日本側は他に展開していた黒田長政や小早川隆景を含め、一月十七日には漢陽の漢城まで撤退して、明・朝連合軍との決戦に備え、総兵力の四万千名を再編する。

明・朝連合軍は一月二十三日には既に開城まで進撃してきていた。日本側にとって戦場をどこに選ぶかが大問題であった。漢城で籠城するには兵糧に不安があった。結局、短期決戦を選んで、碧蹄館渓谷で迎え撃つことにした。広大な原野での騎馬戦を得意とする明軍を狭い土地に誘い込む戦略であった。

明軍の主力を誘い込み、伏兵で左右から攻撃しながら、鉄砲隊が中央を突破する作戦が功を奏し、本営を衝かれた明軍は四散し、開城まで撤退する。日本側は追撃はできながったが完勝であった。これにより李如松らは戦意を喪失してしまう。一方の日本側も消耗が著しく、兵糧も乏しくなっていた。引けば追撃を受けるのが必至で、甚大な被害をこうむる。さりとてこのまま留まるのも補給面では不可能であった。

講和の機運が高まり、日本と明は朝鮮の頭越しに現地での交渉をまとめる。そして日本は四月になると明軍の了解のもとで残りの食料を携え無事に釜山近くまで撤退する。明から見れば兵力の損耗なく、日本軍を漢城から駆逐したことで、明の安泰は確保したことになる。日本は戦闘に勝って戦争に負けた。

そして五月十五日には明の使節が名護屋に到着し、秀吉と会見し本格的な講和交渉が始まる。この時示した秀吉の要求は、当時の状況から見れば現実ばなれしたもので、ゼロ回答が不可避であった。それを避けるためには、既成事実をつくることが何よりも重要であった。せめて慶尚道だけでも実効支配をして、戦果としなければ豊臣

政権の存続さえ危うくなる。

そこで出された方針は、慶尚道の各地に日本式の城を築き、支配の実態を整えることと、晋州城を抜いて、全羅道を支配化に置くことであった。特に、第一次晋州戦で敗退したことを秀吉が激怒しており、晋州城攻撃問題はすでに戦略的な次元を越えてしまっていた。

日本側は第二次晋州城攻撃に総力を注ぐ。これには、やっとの想いで南下撤退してきたばかりの小西行長、加藤清正、黒田長政、毛利吉成、小早川隆景ら五万五千名が主力として加わる。明や朝鮮側から見ればまさに背信行為とさえ映ったであろう。その他、前回の第一次攻撃の主力となった長谷川秀一、長岡忠興や福島正則、蜂須賀家政、宇喜多秀家らの有力大名も加わり、直接攻撃隊だけでも九万余名、これに補給路の確保の三万余名が加わり、総勢は十二万余名。まさに総力をあげての攻撃態勢であった。

日本側は六月十五日に金海と昌寧をでて、途中の咸安、班城、宜寧を占領しながら、六月十九日には早くも晋州城を囲む。

一方の守る側の態勢は複雑であった。南下する日本軍を追ってきた明軍は、小西行長を通じて、講和交渉に障害になるからと攻撃を回避するように働きかけるが、日本側の態勢は既に固まっていた。講和によって日本を追い払うことに期待をかけている明軍は、朝鮮側に、いったん城を明け渡した方が得策であると伝えたまま、傍観者のごとくまったく動こうとしない。

明軍と一緒に南下してきていた朝鮮側の官兵も晋州城の近くまできていたが、その多くも動かなかった。一方、在地の義兵たちも、戦術論をめぐって意見が対立し、第一次戦で活躍した紅衣将軍の郭再祐も城に入るのを拒否する。また当の晋州城主ともいうべき牧使の徐禮元は大軍におののき、城内にとどまるのさえやっとの状態であった。

その中で、推されて指揮とることになったのが義兵司令官ともいうべき倡義使の金千鎰である。副将にはこの時、慶尚右兵使に上っていた義兵将の崔慶会がつく。いずれも全羅道の出身であった。このことが示しているように、第二次戦の主力は前回と異なり地元の晋州勢というよりは、むしろ全羅道の兵士たちであった。晋州城が落ちればもはや全羅道は守れないという危機感のためでもあったろうがやはり異常であった。それでも、第一次戦の倍、すなわち七千名程度の兵士を確保することに成功する。そこまでは良かった。

しかしもっと異様だったのは、非戦闘員が次から次へと城に逃げ込んできたことである。柳成龍の『懲録』によれば六万余とある。そもそも朝鮮半島の城は逃げ込むためのものであるから当然とも言えるが、やはり第一次

戦で日本側を撃退させた経験が大きく影響した。

賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶという。在地の義兵たちが動かない中で、一般の民衆で城内は膨れ上がった。もちろんこれらの民衆の中にも戦闘に耐え得る者も含まれていたに違いないが、これが悲劇を大きくしてしまった。

結果論かも知れないが、明軍が言うように城を空にするか、あるいは郭再祐などが唱えたように守るにしても城の周辺に義兵たちを展開させ、攻めてくれば退き、退けば攻めるのが正解であった。晋州城の重要性は疑いないが、義兵が展開しているかぎり、晋州城を陥としても日本軍はやすやすと全羅道には入れなかったはずである。

戦闘の経過は凄惨であった。秀吉の命は「最前せめそこない候城にて候條、一人も不洩やうに悉可討果事」とあった。この対象に非戦闘員が含まれていたか否かはもう問題ではなかった。攻撃に参加した大名たちは良く知っていた。もうどこにも褒賞の財源がないことを。ゼロサムの世界で、手柄を立てなければ取り潰されるかも知れないという恐怖感が諸将を走らせた。告げ口を極度に恐れた。だからきそって秀吉の命令に忠実であろうとした。

十九日に始まった包囲戦は二十二日から本格化し二十九日まで十一日間に渡って続く。前回の二倍にも達する攻防戦であった。しかも攻める側が前回の五倍にも達する大軍を動員し、歴戦の武将、加藤清正、小西行長、宇喜多秀家を投じる中で、守城側が良く守ったというのが評価であろう。しかし救援の望みや背後からのかく乱のない孤立した城は落ちるのが運命であった。

日本側は前回苦戦した経験を生かして、背後をかく乱されないように、まず周辺の山地を抑える。そして城攻めの基本にしたがって、城の西北側の濠の水を抜いて南江に流し、そこを埋め立てる大土木工事を始めると同時に、城壁の下を掘り、大石を抜いて城壁を崩し落とす工事に取り掛かった。

また、加藤清正と黒田長政は亀甲車と称するタンクのような新攻城兵器を登場させる。これは敵の攻撃を防ぎながら城壁まで近づき、危険時には綱を引いて自在に引き返すことができるようになっていて、やはり城壁を崩壊させるのに用いられた。

連日激しい攻防が続き、双方に多くの犠牲がでるが、結局は六月二十九日の城壁の崩壊が城の運命を決める。黒田長政配下の後藤基次と加藤清正配下の森本儀夫が先陣を争って城内に入る。両将はほっとしたであろう。

この時までに、既に守城側は多くの将士を失っていたが、最後まで残って戦った金千鎰や崔慶会らは南江を臨む矗石楼で慌しく宴を催し南江に投身して果てる。

この時、秀吉の命令がどれだけ忠実に守られたか判ら

ないが、城内では、生き残った者は「司倉大庫に入れば死は免れる」と言って集められ、焼き殺されてしまったという。事実か否かは判らないが、残虐行為はいつでもどこでも類似した形態で起こる。人間の性であろうか。

かくして城内では、人はもとより、牛、馬、鶏、犬に至るまで悉く殺され、南江に投じた者等を合わせると死者は六万余人にのぼったという。死者数については八万余名、あるいは三万余名との言い伝えもあり、定かではないが、水量豊かな南江に死体が上になり下になりぎっしりつまっていたとの記録もある。戦の後、周辺の人口急減により、行政単位を変更せざるを得なかったともいう。

## まさにミスマッチであった。

秀吉の意図が一般庶民までも含めて「一人も不洩やうに悉可討果事」であったとはかぎらない。日本の常識では、城に立てこもって抵抗するのは戦闘員だけであった。しかも第二次晋州戦の前までは、その常識が朝鮮でも通用していた。だから朝鮮に「逃げ込み城」の歴史があることなど知るよしもなく、出された命令であった。

朝鮮側にとってまことに不幸であったのは、第一次晋州戦で勝利を収めてしまったことであった。このことが、戦略的には放棄すべき晋州城を死守するという誤った判断につながった。しかもその上、周辺の住民に「逃げ込み城」の潜在意識を目覚めさせてしまい、地元の義兵たちが戦略的な見地から入城を拒否する中で、逆にこぞって入城するという状況を生じてしまった。

一方、日本側の諸将も秀吉の評価に戦々兢々としていた。もしここで秀吉の命令に忠実でなかったとでも告げ口されたら、家臣一同が路頭に迷いかねない。諸将が相互監視するなかで独自の判断で行動することなどできる雰囲気になかった。そして悲劇が起こった。

かくして第二次晋州城戦は終わるが、その後日本側は結局この城を維持することができずに放棄してしまう。戦闘には勝ったが、実効的な支配はできず、海岸沿いに日本式城郭いわゆる倭城を築いて、拠点を維持しながら講和交渉に臨むしかなかった。しかも日本も明も共に勝者の立場で臨むこの講和交渉では、秀吉の現実離れした要求が通るはずがなかった。

戦闘に勝てば戦争に勝ったことになる日本。第二次晋州城戦の結果は、日本に妥協の機会を失わせる方向に働いてしまう。これでは講和がまとまるわけが無い。現地では明側も日本側も本国政府を偽って講和をまとめるしかなかった。そして四年後に、この虚偽の講和交渉に激怒した秀吉が再び兵を送り、丁酉再乱(慶長の役)という無益な戦争をもたらすことになってしまった。

いま晋州城は市の公園として整備され、市民の憩いの場となっている。南江の流れに映える崖上の矗石楼は観光写真としても秀逸で、悲劇の歴史とともに韓国人なら誰でも知っている。矗石楼の後方には、第二次晋州城戦後の祝宴で、日本の武将を抱かかえて南江に飛び込んだ女性・論介の祠がある。韓国では史上二番目に有名な女性で、韓国のジャンヌ・ダルクと称されている。

また城内には国立晋州博物館もあって、壬辰倭乱・丁酉再乱(文禄・慶長の役)関係資料がすべて集められている。いわば晋州城は、韓国の人たちにとって、悲惨な歴史を語り継ぐひとつの中心地なのである。

ところが不思議なことに、晋州の人たちが反日的かというとまったく逆である。親日と言う言葉が裏切り者を意味していた時代に、韓国で初めて正式に日本語講座を開いたのがここ晋州市の国立慶尚大学であり、いまも日本語教育のメッカである。私が歴史と考古学の研究の合間に、ここ慶尚大学で金属工学を教えるようになってから、既にあしかけ三年になるが、その間一度も反日的なことに出会ったことがない。純朴で心豊かな人たちが晋州人である。

緑豊かな晋州城、南江は今日も豊かに流れている。